新說明清合戰記

三

八13
4433
3

A13
4433
3

川瀬文庫藏書

新続明清合戦記巻之三

第五回　朱瓦明王の依不郎来

こゝに無書ふいたく。波を新己をあるるのゝ百らび戦ふて紙
あ〳〵ぎとろや。勇婦東花孃ハ年四うねゞもよく孫
呉の書不熟し。民を撫育さるを本とし依敵の猛
をあ〳〵めこゝをべ。新うこの勢ふて信義うる清きの大
軍をおろ人不毋ぶりて。千人ンぢく生どりし。官軍の
無所們が。隊を元しとこゝをあるこ。ぶ隊のりのふを
屬しけるあるる仁漁勇猛不毒の人そこ表ふこ。神海の
ごく漁のごく。こゝをのあづこをうけまくわりして。近国の

川瀬文庫藏書

庶民ども、いひ合さねど年ごろの虐政ふつゝめる
をこゝろみをりくまちこの時こと一揆を起して縣へ
よせ酷吏の氏族を追いだしてこだむるのハおろかにして
その郡邑をりて東花嬢の民さゝんとねがふのあまく
あるひハそそうふ上をうゝむ紅縣ども百姓と共ハ
く東花嬢の隊ハ屬しておきゝ付をふせぐぎそる
へ屬重ふるくもむも多くろ。かゝをバ東花嬢を家目もわ
で福州・漳州・両国およびその色数郡を畧しぬる。
その勇その德凡人ハ猶遠省ある幸近の
備候あるひハ畏をいづきて攻らゝんと思ふりめあく。

只のこゝろ誅を隔さゝじと門をきびしく固るのゝ
あつて首をいゝ名をこのかりさゝハ東花嬢ハ
絶滅べしとよろこひて彼孝子朱鳥をむかく羽の国
号を遠べしとて彩うゝの大将公孫策・天貴ども
ちをあざねてその外ハ叔貴と繋をゝぐしつ面を
汚してもゝをゝを寞し。左兄のさゝハいでさちて他
方を泥被処へうちこ、ひそうハ動辭をうゝぐハ
し。朱鳥の父を年貢のゝしんハ酷吏のさゝハ縣へ
ゝつを責らゝて苦ひどけをバ朱鳥ちゝどろ死然
ゝて父ハかりて罪せゝきんと、ねゝぐども叶いまられ

ぢ、竟ふ父ち責ころさきぬ、かゝる折しも病計こる、母も
歎ふ病おりて、おたまをたゞれくありふけり、一時ふ父母と
らーるゝて、天を仰ぎ地ふふーつ、熱涙さくいる
だうふ且ゆふーゝ且らゝめり、紅縣ち朱鳥をも
罪をべーと、笑より土地の土民們ち、わつまゝ歎きて穿
免をひさちゝねゞぐゞ、笑い是ち今ハたや鄰ちーと、朱鳥
ぐゝめふ隊をあーて、緯捕をふせゞんとひーめくふぞ、紅
縣何ゞ〜大ひふいうり、こゞうゝ縣兵をちさゞ〜来つ、朱
鳥をうゝめ捕らんとち、義勇の土民們朱鳥てゝま
けて、陽ぐゝめうゝ縣兵們のいたちひふ歎ーうゝて、

既ふこゝふとゝゝゝゝゝゝゝめ捕らるべうりーー処〜姿をやつせー
東義嬢むゝぐゝる縣兵のあとゞより、さげーく下紅あを
る上の紅縣をやふわよちゝて郷傳ゝる、緯のいたちひ
ふりひゞけねば、縣兵們いゝくおどろれて、ひゝむをゆゝう
と土民們ち、めゝるたちをけふいたちい倍して、奮戦とうち
うゝきば、縣兵們ゝちまちち障碍ーつ、擒ふせゝまーーと
まて〜、あとともゝんぞふ逃ちりけり、東義嬢ち朱鳥ふ
むゝひて、不測義天の微笑ぞと、紅縣をつきやきば、朱鳥
ちゝよろこびとびゝつて、首とぞおとーりる、たのとち東義
嬢ち、朱鳥ふむゝひて、所も縣をさゝゞーつきば、浪

殺をいとはせん。去ぬるも遠処ふるさとへ
帰ふ来なんべし。まことに吾儕ら東花園と名のる扶桑
の勇兵ども遠ざかるひ怒りとりて。海り来ふる土民ども東
花園と名のるも且おどろかれ且よろこび。朱鳥と共
けて罪を懲し去りのどもこもあつてなほ去きて
ふたゝび理をと東花園へうあづきはゝ。朱鳥公の
の徳を考へつゝ今ようとうとび蛮の名を称ぎ。大明再興と
金ぐてり。汝們鳥公の徳を考へ。ぶ不この地ふるまり
て一致して功をあらゝ。清の苛政をまぬかれよと徐
徐鯉源とゝび倣を大河の汀ふつあぎる。准備の一業へ

朱鳥と共ふ奮うまをば土民們が。ふ用引とむるをふり
ちゝひ。掉をあやつる東花園ぶ。船を流へうむをば。ふの
河ふるも天目山。盧山の渓水おちゆさゝて。果ハ福建の
九鯉湖へ。鯇連と注ぎきる。流をげゝき大河ふをば。まゝて
くひまふ快船の。花弓のごゝく。麻姑山の下と遠ゝて。廣
東ふる。湖州の流ふ来ふけをば。船を芦岡へ。ふけハて。淮
備の猶ふ復をゝゝ。夜もをゝゝ又。漕ぐるふ。両個ひと
しゝく掉あやつりつ。流ふして九鯉湖の。波漕ゝるわゝしも
あまたひる。鄱鯉忽然と。波のうへふ浮跳りて。船の中へ
飛こんゝり。両個ふもをゝよろこびの。歌見合しをゝるふ

端を見る図

東花壤
朱鳶を伴て
九鯉湖水
跳奥の
東花壤
朱鳶

勇く、東花嬢い天を拜しつ、爲公行こゝろ思ひのゝむう
周室の記る所、白魚の瑞あゝつまし、その生ん祥まことに
よし、鯽鯉の赤ひいこを朱氏あり、又丹気ふこりてあらきい
南方やゝて南京ふ旅をくべき、右北あること殺ひあり、且無
を記しゝる、福建省い我国の東南の間ふあり、東南ち
辰巳ふて、龍と蛇ふ屬しゝり、龍ごゝち鱗屬の長ふして、
鯉魚いこを龍ふ化をゆの、并ち龍經ふ法まびゝるあり、
こゝをめて拙と記い、こを衆ろ長とありて、勤王の軍を
記し、大明創業の功成るべき、天資をこゝふ見るるの徴をを
のゝあゝび論衡ふ、辰い陽、巳い陰とを、陰陽和して茅柯

發せぜり、明軍東南の一隅ふ倚、茅氏を生育をべき、地
利方位りとめをして、生地ふいづる紹うこの瑞よろこび
ゆゝと東花嬢が、辯論まゝにさゝやゝあをば、朱爲ちその
才を感歎して、かくゝふよろこび孝子と勇婦、ひよく紹を
潰ちやめて、露霜縣ふ攻撃しつ、辯嬢してきいをぬ、朱
爲をつゝれく王位ふ、咸茅嚴をそゝるゝ、ゝるこまよう
国を南明と号しゝて、清の年号を用あをゝ、ゝて東花
嬢が創成ゝして、士卒いさゝゝ攻略し、国郡の廣氏們ふ、
清の夷風をゝゝゝめさせ、頭髮をのゝして明朝の風俗ふ
復しけをべりと上古よりの国風ゆゝふ人ゝるゝこびゝ

をかて、辮子を[illegible]こぐし、髮をたやして、明服をあらゝ
めけまべこまを見るものの義にて、いまゞ東花壤の陽子
つゝぐる国邪の流民們もまさに子と難題の清風をあゝ
めて、明朝の民こるべしと、敵順をるりの数百万人、今ら
流候ふいてるまで、明子屬のもくあうゝねべ、福建浙江
廣東ふおかゝ南明の国とありけり、こゝ子まこ南江府の
こゝをとりある土民們ら、東花壤がいひのこせ、るのゝと
重し、志ゝべ一邪の土民数をつくして、互子ちゝを合せて、
荻縣へおしよせて、酷吏をこゝぐく打ころし、後施聲煩の
戦器を奪こまべいに子ひ子奉じて南江府の城へおしよせ

奉して南江府の城へおしよせ、長義子ぶつちまち城
を攻おとしぬ、こまを南江より急使をのて、揚軍の沒
進あり、東花壤よりこと使をのてよろこみて大ゝさあゝ沒
ゝこの大功、公孫策子士卒二子除務をそくて、一揆の張
本陳立と共子南江の城をまのゝせ、土民の軍功と厚く
賞し、おるひ子土地をあたつられ、揚州の刺史策思
山、南陽の蜂々劉章と、ちゝめ、紀縣們あゝく明子ゝぐ
アゝぬ

第六回　明軍廣州府を攻る事

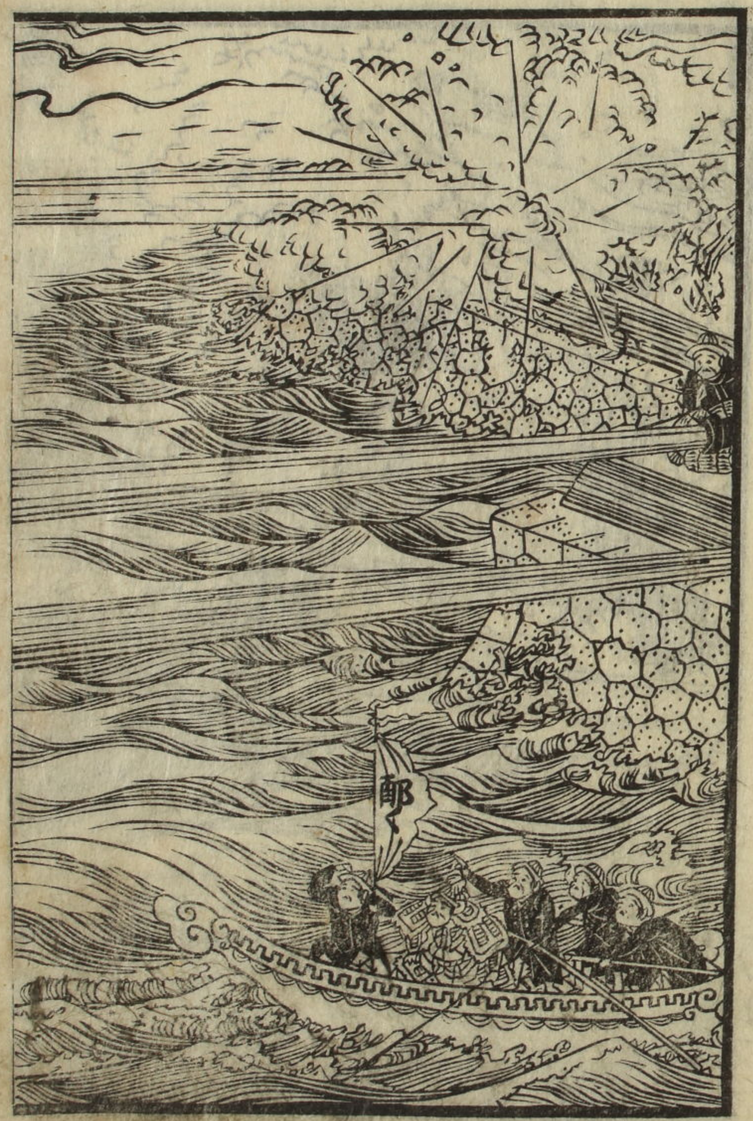
さゝ子福建泉州の渡よりハ、海上百二十里をあれゝる。

東寧といふ巨藩あり。むかしは臺湾とよびなして、彼国は世
爺鄭成功がこゝに堅牢をきつきしより、四代清朝に降
らざりしも、国姓爺の孫にいたりて、清朝一統の治世と
なり、いまだ止ることを得ざりしゆへ、清朝屢しば
よりも、代々この藩のうちにかくれ、孤城ありといへども、
外藩にあるごとくなれど、鄭氏の威名をおそれ、こゝを
去らずあるごとくむかし。老一官鄭芝龍が日本にあり
しとき、把茶の国松浦殿平戸の女に産しなる。彼国
姓爺の母堂をもおのづから、日本魂あり
ものゆへ、光二十年七月、英夷殺掠の

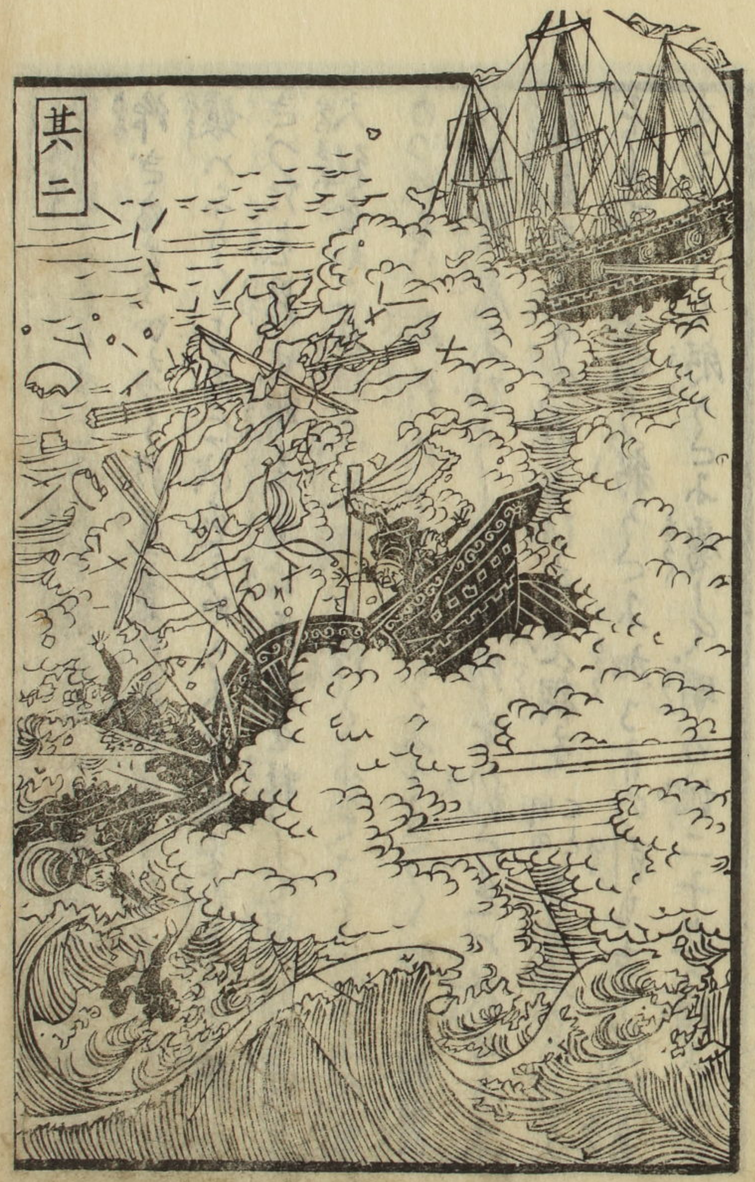
大艦をもて海岸に寇し来る時、鄭氏一家防戦して、奮
軍功をあらはせり。清朝の長司官こゝをそれ
こそ弱うるとおらるる兵猥をもちいこゝをもつて防戦
つるをて、鄭氏一族うちしにせり。時に鄭天麟といふ
ものあり。年ようけきとも文武に長ずる。当時の大丈夫
あり。乃ち、かゝる戦功をきりぬけて、悪しとおりに
長司官の第宅へひそかに入りをどり首をうち
おとして、偽て英夷にふるまひ、時のいくさを候ふとして、清
朝英吉利と和強をのひ、干戈やうやくにおさまりし。
うんを見るべし。土兵をとゝひ、ふるに軍勢をあり

めうふして、屯して、ある英夷どもを、みふてとゞ〳〵対たゝひ、
ふたゝび清を平定して、海防厳重ふあるべく、軍船
神速ふあるべくふ、清人どもの所為ふあるべく、実日本の氣
風ありとこゝを、少々の諸藩ともに、今国姓爺と賞誉
して、感歎せざるものなかりけり。ことより鄭天鱗ら
清ふ親せず、孤清ふ獨立して威をたくまざるし、開
清の祖国姓爺が、ろざしをうけ嗣て明朝恢復の
おもひあり、折〳〵東夷壤が、朱舟を冊て、明国再
興の兵を起し、威を福建ふふるつゝ、つゝく攻めてあわひ
ふよろこび股肱の勇士周令乙揚弟どもふ清をまり〳〵せ、

こゝろ〳〵退兵八百濟を將て、福建ふ来ふけるが、東夷壤
おもひふよろこび、明のこゝろ大切ふある名家の子孫
あるをもて、大元帥ふあさんといひしを、鄭天鱗ともいろ
ひて臣どもをかゝる大任をうふむるべき才あるべこふひとり
の大才子ありそのうゝとが誠切の服肱ともの〳〵耳輝の
淚ふ耳聖といふのれう、良尚ふ房の才ありて、韓信
孔明の孫夷ふ深く、志のゝあるべく猛きこと、樊噲関
羽の義勇あり、寇ふ智勇兼備ありれども、身をもろぶ
ゞ貧ふまどゝも、只清きを耳んづのゝ、世の人その風
を賞して、起龍先生とまうしゝき、起龍八卧龍


郵

東寧島ヲ郵天鏃英夷の艦数艘を打拂図
郵
郵
郵


其八二

三ノ十

の對馬ら、あたまこの人を用ゐて興国の元帥ゆく
仰ぎゆたぶ、ゆあ〳〵ぶ基業の大功あらんと所て東発
嬢いふらくよろこびたまふやう丹照をむうして檀を
きづき乾元界せ、明主爲公天地を稱して軍帥を張ぜる
大弧をおこ赤ひ、大元帥と仰ぐゆぞ、さ〳〵ぬ〳〵ふ明軍
のいたちひ彼竹のごとくあるふ、まさくゆるる羽翼
の臣、統鹿ふひとうたる補佐を引きたび、攻ざるふ
隊系たるもの、あるひたる先人朝を明の志とふものあら
ちゆて、弛まつり、弱うとふ加るものの引もきたび、湖南
もとくく弱うとふ屬して、明の地二十九ら国ふおよ

び、さきとも廣東ら廣州府より、西のうさいまで屬
せぬて、統中廣州府へ、燒浜の地あるをもて、嚮ふ清朝
の大勇臣、摠都督林則徐が、海防のそなへ嚴あるをば、
彼鴉片の嚴令より、英夷海岸ふ寇し、去折、當の恨
くらを、林則徐ふ、もどもうまの勇悍をひそらふおそ
きて、却て廣州府へ、船をよせぬ、去るふ清の官君
候臣、ものら兵端をひ〳〵たし、林則徐が鴉片煙草と、
きびし〳〵禁じ、出へありて、つひふ林則徐の官を
さぐ、禁ふ獄ふ、つるし、英吉利人、笑ておるひふよろ
こび、直ふ廣州府を攻たとせり、さりけもども、林則徐の

後海防のそなへうすく、林則徐の遺法まもるべし。林は器
く、兵いたつて、こゝとなれば南明の猛勢ふせぬのこゝろ。
時をうゝひ変もあゝべ。逆流を退治さへうまとおさく
その計策あり。さるをば福建より、このよしの使え
しうべきをやうふ紙をべし。大え沖耳頭ら、今国
姓爺鄭天驤を出陣の大将として兵二十万を引率
して、七里河をおしうつり、廣州ちかくせ攻よせける。
このとき廣州府の提督なる光ら、智略武勇のものあを
べ。敵及ふまじども動揺せば高州府、德慶府の清廉と
ともに謀じ合せ、ふ廣西の援兵をもつてその勢敵合

二十五万除殺、本陣より二十里六丁一里出張して石丈山の
林あるに陣どりける。明軍やぐてを
づけども、互ふにこゝろあふて戰をたゝめず。むあし
く二日をすをどにその夜清朝ぐて海路を渡て
るの猿猩大夏のさぐひを運漕せるよう、ゆへしうぶ
軍師耳頭いそがしく、雜人ふ命じて大夏を煮させ、
猿猩を数千苞ふつめて、ごまを数百被の船ふ積乗
せ、兵数百人をしてかしとへつるそ。敵の船をさぐり
とめて、ごとぐく夏稃を法ゝうく、番兵水ふ仆ふら
のこりれく、蒙汗薬を飲せてさて、敵の夏稃と

つくろうべくもあるこゝろさの船を漕ぎうりぬ。夜明て清軍の兵
船海辺をあるくゝとむうくゝ出て、弱うこの船を点検し。番
兵水夫船ども船ども水夫兵卒をいくらか部署をあるふおどろけども。いろ
〳〵と走〳〵さまをびまぐ夏蝶を追せ死もせ〳〵ぞ
せもせぬ。番兵水夫船ども船をいさをりて陣中へきもて
うりぬ。さるおどろ耳聾を。敵おる光智勇ありと。
うをて攻おりくるる白〳〵ふ力をうて攻〳〵うづ士卒を
多くうしあちこと。思ふ折うう敵うく〳〵夏蝶を運漕
せるよう。こゝ寛竟とおろひふよろこび。毒を志とみ〳〵
夏蝶と。積うく〳〵を敵うくゝ。ちんともこゝろつうざり

けるべ。今朝陣中へこゝ〳〵運びいふ多ありぬと。耳
照を明らをたりて。士卒をうり出しを合せの戦ひ
をいくむふぞ。敵ぐこふも陣をひゝき。ひゝく嚮と聞
をつうりつ。先をあゝをひきゝみよりて。西洋砲ちびゝで
〳〵うち合せ。山を動ゝ地を震ふ。海の中を両
陣より。数出して入こゝ。夏蝶をうちつうきつ戦ふおどふ
清軍の将士算をこゝ〳〵ゝて。るようまろびおろるふぞ。
大家さぐひふおどろ死見まべいるやゝけん湾ゝる
るの。儲を折。血を吸て斃るて。数千匹。まゝ〳〵をあゝ
ゝて部ふけるる。清軍こゝふ興さめて。笑めくこゝろを

鄧天鷂
てんよう
三ノ十四

張秀
石丈山之
麓ニ張秀
今國姓
爺ト
勇義之
図

其照ゲ羽扇をもて招き給へば紹ハ明軍の
勇士猛卒どもあめきて おりてもふ〳〵攻入べ清軍ハ
大勢なれども 待て武者こゝるをとり〳〵あひ 流ぎちゝあり
けるあぞ さんゝ〳〵ハ 孤ちゝさきて うち死疾あひ殺を
あゝ〳〵 こゝハ張秀といふ りのあり 廣東ハあゝびるのき
万文亜尚の猛者ハ してゝ ゝびる光ゲ陽ハ 奮ゝ この
陣中ハ あり ゝをべ 方 僅 ゝゲ 垂ハ ゝを 死 ゝて 流
ぎちハ あり ゝをゝもハ ちゝもハ おゝゝけ ゝ 死 く 重 く
六十 行 ゝり ゝる 麼 ゝ ゝる 令 後 拳 を いも 易 げハ
ふりまゝ ゝつ ゝる ハ ゝ ゝ 撃 作 せべ この 後 持 ハ ゝを

るゝの 首ともいたゝ 辮 ゝもいたゝ みゝんハ ゝゝけて 死
でけゝ 寝ハ 弟 宵の 勇烈 多カ ゝを い 蜀の 五丁カ士ゲ
再来ハ やゝ ゝんぞゝ ゝんと おゝを て 近 ゝの ゝ
ゝを ゝめハ 防 ゝを ゝる 弱 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
め 紀 ゝて 見 ゝを ゝ 今 国 奴 爺 鄭 天驤 ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝを ゝ ゝ ゝ 火 煙 を 殊 ゝ 糸 を 奎 ゝる 大 渓 槌 を
ひゝめ ゝて 暴ハ 暴 ゝ 恭 ゝる 張 秀 と 奮 激 突 戦 殺 合 ゝ
ゝゲ 張 秀 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ
ゝと ゝ ゝて 怯 ゝを 遁 ゝ ゝ 鄭 天驤 ゲ 陸 ゝ ゝ に 張 秀 の
眉 間 を 撲 地 と 跳 ゝ ゝ け ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ

て、作ることろを拾うやと。明の士卒ども、おりうさあり、
縄をうけてぞけどりける。清軍まちかのききつる。漢
秀のくのごとくあるをば、くをうしるのみて、ひとしく
どつと級をとりをどもみな歩兵のことあるをば、明兵のよく
いきるひ猛ふ、おうとく追つめく、槍掠の名おそろ
けり

新説明清合戦記巻之三了